続・中川経雅の交友録
――本居大平との友情（その二）――

倉本　昭

わたしは本誌第40号掲載「中川経雅の交友録」以来、神宮文庫所蔵『経雅卿雑記』（自筆本）の記事から、内宮神官・中川経雅と伊勢地方の文化人との交友の実態をながめてきた。前号からは鈴屋一門との交流に眼を向けているが、経雅はとりわけ本居大平との交友が厚く、この関係を軸に全国の和学者との交流を実現させている点が注目に値する。そこから近世中期における神宮文化サロンともいうべきもののあり方が見えてくるからである。今回は前号に続く大平関連記事を抜粋しながら、さらに両者の関係に対する考察を深めていくことにしよう。

（前号よりの続き）

⑯　寛政九年巳九月十一日松坂本町稲懸十介大平より本居宣長（筆者注：ノリナガとルビ）著述内宮文殿へ奉納申紹介之事頼来候。即年番へ相渡。近日受文遣候様申入。予経雅へも一冊恵送候。其後受文到来。則大平方へ送遣候。

（注）『天祖都城辨辨』は伊勢の儒者・河北景楨の『天祖都城辨』を反駁した書。寛政九年五月に版本が出来したと『著述書上木之覚』（筑摩版全集第二十巻　三七四頁。以後全集は全て筑摩版）に見える。⑮の記事にあった熊本の長瀬真幸に宛てて宣長が出した十一月二十五日付書簡に本書のことが触れられている。内宮の御文庫である林崎文庫に納本する記事は既に⑥、⑫にあった。年番は誰であったか確定できないが、⑭の記事では寛政九年四月に高本慶蔵が林崎を訪れたい旨大平より知らせがあり、経雅は文庫執事・守屋徳大夫昌綱に紹介しているから、昌綱と考えるのが妥当か。

⑰　寛政九丁巳九月廿六日稲懸大平より申越候。

孝寿大とこハ法花の宗門にて仏ふみハさらにもいはず、世のまなびをもいとよくして、ことし五月の比より万葉集などの事をもならハんとて、わが大人にしたがひて、ここにとどまりいましけるを、九月廿日比故郷の泉の堺にかへり給ふに、

よみてまゐらす。

大平

わかれてハ又いつ見んとゆく君がさかひはるかにおもほゆる哉

九月十三夜

八月ハだんごのやうにまるかりきこよひハまめかすこし長月

大平

（注）孝寿は寛政九年六月十三日宣長に入門した泉州堺の僧で、日蓮宗（『授業門人姓名録』。テキストは『本居宣長と鈴屋社中』所載校本〈錦正社　昭和五九〉）。ただし『金銀入帳』寛政九年七月八日の項では若山感應寺の住と見える（全集第十九巻七五三頁）。宣長の同年七月二日付長瀬真幸宛書簡（全集第十七巻三七九頁）にこの僧の記述があるので引こう。

「一、只今泉州堺産之日蓮宗之僧孝壽ト申ス、皇朝学志有之、当地へ参逗留に御座候、此僧、仏学漢学共よろしく、殊ニ老荘を深くまなひ、当地に而も老子之講尺なと致し申候。いまた卅才ニ不満候僧ニ御座候へ共、学問丈夫ニ見え申候。歌もよく出来申候。」

これによれば、大平のいう「五月比」は正しくは六月と考えられる。

孝寿は『金銀入帳』を見るに、九月十日に金一分を納れている（全集第十九巻七五五頁）。大平のいう「廿日比」は正しいのであろう。この記事は大平が折々の歌を経雅に披露していた証である。十三夜の作を挨拶代わりに遣わしたついでに、孝寿への送別吟を添えたのであるが、前者は他愛ない狂歌であり、大平と経雅の関係の親密さが、かようなものをわざわざ遣わすあたりに想像される。

なお神宮司庁編　大神宮叢書『大神宮儀式解・外宮儀式解』付録の「中川経雅卿年譜」に寛政九年九月二十一日大平が訪問した記事があると記されるが、これは八年九月二十一日の誤りである。前稿⑪の記事を参照されたい。

⑱ 寛政十午年正月試筆

松坂本町稲掛大平

神道山千代のみとりも春の色に霞初ぬる峯の松ヶ枝

⑲ 寛政十年戊午十月廿三日二見左兵衛定津、松坂田丸屋十介大平入来。松坂中里平兵衛常秋・青木恒蔵茂房・上田藤助桃樹・殿村五平安守入来。談国学。大平より筆五対、四人より南鐐一片恵候。今日大平所詠之由

山姫もきつゝ見るらんくれなゐのミもすそ川の深きもみちは

大平

寛政十年十月

ふるふらぬこゝろハ風の時雨哉　　経雅

（注）この記事は大変に重要な内容を持つものゆえ、注を兼ね、以下に小論を付することにしたことをお断りしておく。

鈴屋一門が大勢経雅を訪問した重要記事である。二見定津は本随筆に宇治土公の称で頻繁に登場する。内宮権禰宜である。『授業門人姓名録』寛政八年二月に名が見える（前出テキスト九七頁）。中里常秋は五兄弟で宣長門人に名を連ねたうちの三男。『姓名録』安永四年に名が見える（『姓名録』テキスト二九頁）。『姓名録』自筆本によれば初め伴蔵と称していたのを平兵衛と改めたとある。寛政十二年に没。青木茂房は松坂の人で寛政九年三月九日入門（『姓名録』テキスト一〇一頁）。上田桃樹は「百樹」とも記す。京の人、鍵屋号。寛政九年十一月入門（『姓名録』テキスト一〇四頁）。妻は大平門。こののち享和年間にも二度記事にあらわれ、経雅を親しく訪問していたことがわかる。殿村安守は松坂の人で、いわずと知れた殿村篠斎である。寛政六年三月入門（『姓名録』テキスト一〇二頁）。

ところで大平以下鈴屋門下は、何の目的で経雅を訪問したのか。参宮ついでに、京から来た上田を紹介できる便宜もあって、学友を訪うたと、まずは考えられよう。

しかしながら、この寛政十年十月という時期は、本居宣長にとっては、自著開板にまつわる問題で心労を抱えていた時期であり、また内外両宮が互いに緊張をはらむ関係にあって、しかも、宣長の悩みと両宮対立の問題は無縁ではなかったのである。

以前からくすぶっていた内宮外宮の優劣論が、ここへきて俄かに問題となったのは、経雅に親しく、宣長門でもあった内宮権禰宜・荒木田末寿が寛政六年に草した『内宮外宮之弁』と、その詳解として、寛政八年に書かれた『内宮外宮弁身禊海』を端緒とする。末寿は外宮の御祭神を豊受大神とし、この神は天照皇大神の御膳の神であるから、内宮と外宮とは「隔別の御事」とし、外宮方を糾弾した（中西正幸『益谷末寿の両宮観』初出昭和五五年。『伊勢の宮人』〈平成一〇年　国書刊行会〉に所収）。なお『身禊海』に経雅の「はし書」が添えられていることは、二人の交友関係からしても充分首肯できる。

そんな中、寛政十年春、外宮御師・小田石見が秩父の檀家廻の途で内宮御師・薗田守諸家（末寿と守諸の妻は姉妹の縁）が頒布した紙面を入手した。それには末寿の『内宮外宮之弁』が掲げられていた。両宮優劣につき由々しき言説を読み取った石見は、山田三方を通じて神宮に注進に及んだ。時に三月十六日。問題は、ついには山田奉行のとりあげるところとなり、七月十五日に、「両宮者一体之儀」と認識した上で、その優劣を書き顕わして檀家に広めるのは「甚以不敬之至」であるとの達しを、両宮長官名

代・両会合惣代に下した。ところが翌日には内宮方が「両宮者一体之儀」の文言にクレームをつけ、奉行所が当該文言を削除するという事態が生じている（前掲中西論文による）。

この騒ぎを受けて、宣長は寛政十年五月には『伊勢両宮之弁』草稿を一冊四十枚ばかりの体裁で完成させている（五月二十八日付千家俊信宛書簡。筑摩版全集第十七巻四一九頁）。

これは後に版本となる『伊勢二宮さき竹の弁』の再稿本とみなされているから、宣長が両宮之弁執筆を始めたのは、小田石見の御注進が問題化した三月下旬あたりとも思えるが、実は三月二十四日付安田廣治宛書簡に、「両宮弁書之事、先書にも申進候通、成程五十槻子被申候通之事に御座候はば」とある（筑摩版全集十七巻四一三頁）。書中、「五十槻子」は荒木田久老。彼が天明三年の著『槻の落葉心やり』以降に展開した所説に従うというのである。この二十四日付書簡の「先書」で既に両宮之弁について触れたとあるから、小田石見注進の件より以前に執筆動機はきざしていたと見た方がよい。

では宣長執筆のきっかけとなった背景はいかなるものか。

両宮優劣について久老の論敵となった幸田光隆の『神風撥霧集』が寛政八年七月に出版された。中西氏の説通り（「益谷末寿の両宮観」『伊勢の宮人』二五九頁）、久老―光隆の論争が宣長を衝き動かしたと考えてよいであろう。筑摩版全集別巻三―五七七頁に掲げる寛政八年十二月十二日安田廣治宛書簡も参照されたい。

同年五月に経雅は末寿の外宮神号・宮号調査について『雑記』に記し、九月に『身禊海』はし書を草した。翌九年には末寿が『内宮外宮弁略解』を成稿させている。

鈴屋入門以来、宣長との交わりを深める末寿の両宮観と彼の著作活動について、宣長は察知していなかっただろうか。もちろん『身禊海』に宣長説が援用されていることだけで、その可能性を指摘できはすまい。そこで『経雅卿雑記』から寛政七、八年にわたって、宣長・末寿の関係を示す記事を抜粋してみると……

寛政七年四月九日、宣長は参宮の折、末寿の父・末偶宅に宿り、十日十一日と同所で講義を行う。同年六月九日には末寿から宣長に音物（中西正幸「益谷末寿」付載年表『伊勢の宮人』二三九頁）。寛政八年四月十五日には大平から経雅に対して、末偶に書簡を届けてくれるよう依頼が来る。同年七月八日には末偶より経雅に宛てて、宣長・大平の桑名行が知らされる。九月から十月の間に、末寿が宣長に万葉について質問し、その答書を経雅が記録する。

以上の記事からも、末寿と鈴屋との密接な関係がうかがえるから、末寿の両宮観を宣長が存知していた可能性は否定しきれない。

いずれにせよ、寛政十年春からとりかかった両宮之弁を擱筆した宣長は、もと外宮権禰宜であった久老に依頼し、外宮長官を筆

頭とする外宮方のお墨付きを得るのが上策と判断した。万が一の筆禍に備える心積もりであった。当然、筆禍への懸念の根拠として、三月十六日小田石見の注進から始まった騒動が念頭にあろう（中西正幸「益谷末寿の両宮観」『伊勢の宮人』二六二頁）。

そこで末女の婿であった安田廣治（豊秋）が外宮宮掌大内人であって、山田住、しかも久老に親しいことを幸い、まず彼を仲介に、久老に書信をしたためる。久老は安田宛宣長書簡を同封して、外宮五禰宜・松本算彦に宛て書信を送った。四月五日付であった。久老書簡で説明される宣長の主張は、内宮方が外宮の御祭神をおとしめる僻説を破り、外宮御祭神を国常立尊ならずして豊受大神なりと考証し、その尊さを確認することで両宮の優劣論を廃するというものであった。久老は、今更豊受大神とするのには無理があるし、そのような著書に外宮長官の序を請い、出版に至らしめるのは差し障りがあると退けたものの、宣長再三の懇請にもだしがたく、ついに松本に相談したのだとしている。算彦の父は二禰宜・言彦であったから、この二人に打開策をゆだねたのである。

この結果、外宮方から得た返事は曖昧なものであった。六月十七日付久老宛宣長書簡によれば（筑摩版全集第十七巻四二一頁）

板行之儀も是非之沙汰に及不申候旨有之候。右之通に而は、何れ共相分り不申、万一板行仕候上に而、さし構被申候儀御座候而は、迷惑に御座候

とある。

宣長は、そこでもう一度、久老に外宮方への聞合わせを依頼した。返事は十月二十七日付久老宛の書簡によってうかがえる。

一、さき竹の辨之儀、五神主より返事有之候由、右紙面御見せ被下致披見候。成程旧来之説と違候事ニ御座候へハ、表向同意ハ有之かたき品、一通り尤成義ニ奉存候。乍去右之紙面之趣を相考申候処、出版いたし候とても、あなかちさしかまひ被申候儀ハ有之間敷歟と推察仕候。（中略）神宮中内存之所、よそなから追々御考被下度奉願候。（筑摩版全集第十七巻四三五頁）

注意すべきは、同書簡にある次の文言。

一、此間は大平久々ニ而得拝顔、寛々御芳説共承り候由申候。伝承仕り大慶之至奉存候。

続いて、翌二十八日付で宣長から娘婿で久老との間をもった安田廣治に宛てた書簡（筑摩版全集第十七巻四三五頁。なお『さき竹の弁』執筆の経緯については同全集第八巻『さき竹の弁』解題

も参照した）。

一、五十槻子より被為見候五神主書状、致披見候。さき竹の弁之儀、神宮中同意しかたき之由書面、成程一通り左様ニも可有之儀と被存候。此儀此度委細五十槻子へ申遣候間、御聞可被下候。且又同人萬葉つきの落葉の序文相認、此度遣し申候。是又御乞覧可被下候。

一、此間は大平参り、寛々得貴意致大慶候段申候。肥前風土記致落手候。

大平は久老と廣治を続いて訪問しているのである。二十七、二十八日付書簡に「此間」として面会を記すとなると、大平が両者を訪ねたのは、二十三日に経雅を訪ねた折の伊勢行の機会にあわせてと考えるのが自然であろう。

大平は内宮方の経雅・久老、外宮大内人の廣治を訪問していったわけで、二十三日の伊勢行の折となれば、経雅宅に同行した人々も久老・廣治両者を訪ねた可能性が高い。

大平が学友経雅を訪ねるのは珍しいことではなかったが、このたびは同行の人数が目立って多い。京から来た上田を紹介するにしても、寛政九年に肥後の長瀬真幸と二人で経雅を訪ねた記事を思いあわせるに、やはり供が多すぎる。

ここでもう一度⑲の記事を見てみよう。大平らは経雅と「談国学」とある。「国学」の語は寛政十年十月二日の記事に出てくる。彦根の源政足が守屋昌綱宅へ来たので、経雅が訪ねていって、「国学国歌之事申承候。此序近江国日雲宮坂田宮筑摩祭之事共相尋申」したとある。これによると「国学」は歌学とは別のものと認識されているようで、話が神社や祭祀の話題に連なっていくものである。大平ら六人衆が経雅と談じたのは、あくまで国学であるから、和歌は話の俎上に上らなかったのであろう。

次に大平以下六人衆について、宣長の『借書簿』（筑摩版全集第二十巻四四〇～四四一頁）を見ると興味深いことがわかる。寛政十年六月二十四日に六人衆の一人中里常秋の兄・常岳が『両宮辨』を借覧している。八月には上田百樹が『両宮辨ひかへ本』を借覧している。五人が経雅を訪うたのちの十一月九日に殿村が『さき竹辨』借覧。つまり寛政十年中、鈴屋門下に『両宮之辨』『さき竹之辨』が閲覧されはじめ、六人衆のうち上田は、経雅を訪ねた際、この書を既に読んでいたことになる。三月には末寿『内宮外宮之弁』の問題性を小田石見が注進、山田奉行の詮議となって、七月十五日に裁定が下されているから、宣長の書も大変な関心をもって門下に迎えられていたのである。

そして大平（恐らく他の五人も）は経雅訪問と相接して、久老・廣治をも訪ねた。あとの二者に対しては、『さき竹の弁』についての話題が交わされたこと、宣長の書簡に照らして明らかである。

とすれば、経雅と談じた「国学」も、内宮外宮優劣論が主であったと考えられないか。経雅は大著『大神宮儀式解』の著者であり、四禰宜従三位という身分からも、その思潮が内宮方への大きな影響力を持つはずだった。（ただし経雅が末寿の両宮弁書に序を寄せた事実を宣長・大平が知っていたかは定かではない）。宣長も高い関心を持っていたであろう。

よって大平は、宣長の意を受けて、経雅の両宮優劣論と、論争騒ぎへの反応を探ったのだ、と考えるのはいかがであろう。

大平が経雅と親しい上に、京からやってきた門人・上田を紹介する体裁をとれるから、一行の底意をあからさまにすることを避けられた。内宮権禰宜二見定津を連れているのも、経雅の警戒心を緩和する意図があったかもしれぬ。六人が伊勢へ上った理由は、当然参宮目的と表向きにはとられたことだし、定津は案内役というわけであった。一行は、末寿の著作についても経雅から聞けたはずである。

久老の元では、宣長の依頼を聞き届け仲介の労をとってくれた礼を伝え述べると同時に、今ひとつ曖昧な感のあった外宮側の反応についても具体的に聞きただせるし、同時に久老の所説のみならず、書簡にはあらわれにくい本音の部分をも承れる。彼は外宮権禰宜から内宮権禰宜に転じたけれど、所説に偏頗なく、実証的で、宣長の受け入れるところとなった。このたびも内外両宮方をとりむすぶ媒介として鈴屋から重視された人物である。

そして安田廣治は外宮方の人物で、宣長の娘婿であるから、心安く、外宮方の反応を聞ける。

こうして内宮方外宮方両方を訪ね、当時のそれぞれの様子を確認したことが想像できるのである。

大平が率いた五人のうち、殿村・中里が、他の三人より早く鈴屋門を叩いた人で、いずれも松坂の人。大平は、彼ら信頼に足る同門に、京から来た比較的新参の上田らを加え、向学心から神宮の識者によしみを通じる旅をしているのであり、参宮も兼ねた、という風に見られながら、その実、宣長が渦中に入らんとしていた両宮弁問題に深く関わる目的を有していたのではないか。大平がのちに殿村に与えた『恩頼』に名の挙がる鈴屋門下に殿村・上田・安田がいる。中里常秋は寛政十二年に没するが、兄弟の長谷川常雄・中里常岳が挙がる。『故翁門人姓名録之内大平并春庭方音信不絶分』には二見定津の名がある（『本居宣長と鈴屋社中』〈昭和五九年　錦正社〉中　鈴木　淳「『授業門人姓名録』の論」三二二頁、三二六頁）。よってこのたび大平がともなった五人は、のちのち彼にとっても重きをなす宣長門下であったわけだから、伊勢行の人選には宣長・大平の配慮が働いている感すらある。

しかし、結果的には宣長が久老・廣治にあてた十月二十七、二十八日書簡の通りで、宣長が期待するだけの進展ははかれなかったのである。筑摩版『本居宣長全集』第八巻の『さき竹の弁』解題は、出版に至るまでの経緯が詳細に書かれていて誠に興味深い

が、廣治宛書簡の紹介のあと、「そして、以上の経緯を経て、宣長はいよいよ出版の決意を固めたらしいが」として、寛政十一年六月七日植松有信宛書簡を引用する。その前、三月九日には板下を書了していることにも注意したい。

『経雅卿雑記』を検するに、六月七日以前に興味深い記事がある。既にいくつかの論文で紹介されている事実だが、三月十四日宣長七十賀歌を経雅は二見定津経由で贈っていること、そして、四月四日の宣長・大平参宮のこと、その折、経雅と文殿で対面していることである。

この記事は全集についた宣長の年譜とあわせると、更に興味を増すはずである。

この年、宣長は一月二十一日から和歌山行。二月二十八日に松坂に帰着している。月がかわって、三月十六日、七十賀会興行。これに間に合うように経雅は賀歌を贈ったのである。そして、四月三日伊勢行。宣長は娘婿・安田廣治宅を宿とした。翌日、参宮の日は、二見定津宅宿。五日からは再び廣治宅へ移り、八日まで滞在している。

両宮参は和歌山における講義からの無事帰着、七十賀に関わるものであろうが、経雅との対談では、両宮優劣論の件が出たかもしれない。ちなみに久老は、この折在京中であったから訪ねていない。宣長・大平の参宮に両宮弁と関わる目的をことさら強調するのは明らかに誤りである。しかしながら、六月までに『さき竹の弁』刊行を決意したのは、このたびの参宮の折に得た感触にもとづくものであったかもしれない。

以上、⑲記事を宣長の両宮弁に関する著作活動とからめて考証を加えた。つとに有名な、宣長一行が伊勢詣での途上に経雅を訪問する記事も、このたびの論を踏まえて再考すれば、おのずと新たな意義が指摘できるが、それは続稿を期したい。（続く）

（注）翻刻文中句読点ならびにカギカッコなどは読者の便宜を図って筆者が補ったものである。また漢字は書名、固有名詞以外は現行の字体に統一した。筑摩版『本居宣長全集』本文の引用の際は、固有名詞・地名以外を現行の字体に直させていただいたことをおことわりしておく。

本稿執筆において貴重な資料の閲覧の便宜を図って下さった神宮文庫に多大なる謝意を表する。